

タイトル:平成 25(2013)年度 教育セミナー

日時:平成 25 年 9 月 20 日(金)～23 日(月・祝)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「新生リビアのガバナンス構築に向けた課題—「政治隔離法」を巡って」

小林 周 (慶應義塾大学大学院)

9 月 20 日(金)～23 日(月)のセミナーを終えた翌週、JICA の調査団に同行してリビアを訪れた。1 年半ぶりに訪れた新生リビアでは、国家行政プロセスが停滞し、インフラ機能や治安が悪化し、まさにセミナーでの発表で扱った国家ガバナンス構築が最大の課題であり、難関となっていた。一方で、話を聞く限りでは都市の区画や地域レベル、また部族内での「ローカル」な互助や治安管理は機能しているとのことであった。セミナーでの発表に対して黒木先生から頂いた『「ガバナンス」の定義から批判的に再検討すべき』とのコメントが、強く想起された。

リビア訪問中、そして4日間のセミナーの間に漠然と考えていたのは、ディシプリンとの向き合い方である。ディシプリンを定めることが研究遂行に重要なプロセスであることには疑いがないが、逆に自分の関心と問題意識、フィールドでの発見に忠実に研究を進めることで、既存のディシプリンを相対化していくことができるようにも思う。また同様に、フィールドとの向き合い方、心構えについても、先生方のご講演やお話を伺う中で気付かされる点が多々あった。例えば村上先生のご講演には、決して外部の調査者としてだけではなく、一人の人間(もしくは<女性>)としての現代トルコにおける名誉意識と暴力の連関に対する問題意識が込められていたように感じられた。

その他にも、中東地域、イスラーム、建築、歴史等の大家である先生方は、ご自身のこれまでの研究・調査の蓄積と現在の様々な変動を有機的に結び付け、深く、広い視野を構築されていることを目の当たりにした。例えば床呂先生のペルシャ湾岸の真珠、スルー海の海賊のお話や、黒木先生のシリアの絨毯商人とのやり取り、ダイヤモンドを巡るユダヤ人とヒズブラーの関係のお話など、伺っていてまことに興味深く、それでいてそれぞれのご専門と密接に関係したご経験と知見をお持ちであった(上記のお話は全て懇親会中、杯がかなり重ねられてからのご披露であったが)。

発表では、カッターフィー政権幹部の公職追放を定める「政治的罷免法(Political Isolation Law)」を巡る議論や新制度構築上の課題、内戦中に生まれた民兵組織の武装勢力について分析しつつ、新生リビアのガバナンス構築における課題について考察した。発表に対する心残りはいくつもあり、例えばリビアの事例と現在の中東地域における政治変動全体との結び付けが足りなかった点、また上記の通り重要な概念への検討が浅かった点などが挙げられる。しかしそれでもなお、セミナー参加者および先生方への発表と議論を通し、自分の研究の課題と可能性を発見できた点は、セミナーに参加し、そして発表の機会を頂いたからこそ得られた成果であったと考えている。

講師や司会等を務めて下さった先生方、参加した学生の方々、そして事務局の千葉様をはじめ今回のセミナーの運営に関わって下さった全ての方に、心より御礼を申し上げたい。